

第 4 章

タミルナードゥ州の女性労働組合（PTS） オーガナイザーの声、生活、労働

太田 仁志

要約

本稿ではタミルナードゥ州の女性労働組合（PTS）のオーガナイザーからの聞き取りを用いて、彼女たちの生活（ライフ・ヒストリー）と労働をみるとともに、非組織部門における労働組合の組織化を別の角度から検討した。聞き取りからは労働組合を通じた女性のエンパワメントの過程が示され、また非組織部門の労働組合の組織化における福祉基金の重要性も明らかになった。

キーワード

タミルナードゥ州、女性労働組合（PTS）、非組織部門、福祉基金

はじめに

筆者はこれまでに、インドの労働組合の組織化に関する研究をフィールドワークを交えて行ってきたが（たとえば太田[2009; 2011b]）、「非組織部門」での労働組合による組織化の動態（太田[2011a]）の一層の解明は、今日も残された大きな課題である。本稿ではその点に関し、分析視角を若干変えて接近する。具体的には、タミルナードゥ州の非組織労働者を組織する女性労働組合（PTS）のオーガナイザーへの聞き取りを用いて、現場からの声をみる。

インドでは「非組織部門」とは、統計の定義として、従業員規模が 10 人に満たない民間企業（また一部、規模 10～24 人を含む）を指すが、このような定義は統計データを収集する以外、あまり意味をなさない。またインドのではこの「非組織」と途上国の経済社会に関する議論で用いられる「インフォーマル」を同義に扱うことがしばしば見受けられるが、筆者はこの 2 つを明確に区別する必要があると考えている。それは「フォーマルで非組織」もあるし、非組織とインフォーマルは同義ではないから

である。筆者が「非組織」に注目するのは、そこからは、組織規模やインフォーマル性でなく、どのように組織化がなされるかを問うことができるからである。太田[2011a]では Kannan[1999]や佐藤[2003]を受けながら、労働組合による非組織部門の組織化と福祉基金との関連を論じているが、本稿では角度を変えて、実際に非組織労働者の組織化に取り組む女性オーガナイザーの声を拾うとともに、彼女たちの生活（ライフ・ヒストリー）と労働をみることにする。それを通じて、限定的な事例にはすぎなくとも、彼女たちがどのように労働組合のオーガナイザーになったのかを知ることにもできる。また、福祉基金が労働組合の規模拡大に貢献したという事実を本稿で確認できた点を、とりわけ強調したい。

本稿では、第1節で背景や方法を論じ、第2節で2011年に実施した労働組合女性オーガナイザーの聞き取りをまとめる。最後に聞き取りから見出された諸点を整理する。なお、研究会の性質上、また第1節第3、4項でみるような事由で、本稿は粗い、試論的なとりまとめ内容であることを、あらかじめお断りしておく。

第1節 用語、背景、方法

1. 言葉とアクターの説明

まず用語から説明する。インドでの非組織部門の定義は冒頭で見たが、本稿では組織や機構に組み込まれていないといった程度の緩やかな定義を用いる。非組織労働者は、組織に組み込まれていない労働者である。厳密な定義ではないが、しかし本稿では「非組織」であることはそれほど重要でなく、基本的には、非組織部門の女性労働者の組織化に取り組んでいる PTS という労働組合を語るときに出てくるだけである。

その女性労働組合（PTS）は、タミル語の「Penn Thozhilalargal Sangam」の和訳である。PTS はスジャータ・モディ氏によって1999年に組織され、2001年に労働組合として登録を果たした、自営や日雇い労働者などの一般に低所得者、貧困層にある女性労働者を組織する、一般労働組合である。現在の組合員数は公称で1万人強である。モディ氏はPTSを創設する前に、貧困女性を支援するNGO組織マラーチ女性資源センター（以下、マラーチ）を作っている。またその後、ガーメント・ファッション労働者組合（Garment and Fashion Workers Union、GAFWU）を2008年に設立し、アパレル工場労働者の組織化に取り組んでいる。PTSもGAFWUも、非組織労働者の組織化に取り組む「労働組合の新しいイニシアティブ」（NTUI）の加盟組織である。

またオーガナイザーは、PTS から正式に指導的な立場を与えられた組合員を指す。PTSのオーガナイザーは、委員長であるデヴィ氏や事務局長のモディ氏などの上層指導部の指名ではなく、組合員集会での組合員の同意によって選出される。

最後に主要登場人物について先に述べる。スジャータ・モディ氏はすでにみたように PTS 事務局長と、GAFWU の委員長を務める。PTS の委員長はデヴィ氏で、サンタナマリ氏は PTS アンバットゥール支部長である。ゴウリ氏は GAWFU 副委員長、またメグナ・スクマール氏は GAWFU の組織化書記 (Organising Secretary) である。

2. 福祉基金について

とりわけタミルナードゥ州の労働組合は貧困層への社会保障として、福祉基金の創設に力を入れてきた。本稿でも労働組合女性オーガナイザーから福祉基金についての言及がたびたびなされている。表 1 は福祉基金の給付をもまとめたものである。

表1 非組織部門労働者への福祉基金給付

1	Personal Accident Relief	Rs 100,000
	A. Accident Death	Rs 100,000
	B. Loss Of (i). Both Hands (ii) Both Feet (iii) One Hand & One Foot (iv) Total and Irrecoverable loss of sight in both eyes	Rs 100,000
	C. Loss of one hand, one foot or loss of sight in one eye.	Rs 50,000
	D. Other disablement	Percentage as assessed by Dctr.
2	Natural Death	Rs 15,000
3	Funeral Expenses	Rs 2,000
	Educational Assistance (For two children of the worker)	
	(i) if the son or daughter studying 10th Std	Rs 1,000
	(ii) if the son or daughter passed 10th Std	Rs 1,000
	(iii) if the daughter is studying 11th Std	Rs 1,000
	(iv) if the daughter is studying 12th std	Rs 1,500
	(v) if the son or daughter passed 12th std	Rs 1,500
	Regular Bachlor Degree Course	
i	For Each Academic Year	Rs. 1,500
	For Hostel Students	Rs. 1,750
	Regular Post Graduate Course	
ii	For Each Academic Year	Rs. 2,000
	For Hostel Students	Rs. 3,000
	Law, Engineering, Medicine, Veterinary Science & allied Professional course	
iii	For Each Academic Year	Rs. 2,000
	For Hostel Students	Rs. 4,000
	Post Graduate Professional Course	
iv	For Each Academic Year	Rs. 4,000
	For Hostel Students	Rs. 6,000
	I.T.I. or Polytechnic Course	
v	For Each Academic Year	Rs. 1,000
	For Hostel Students	Rs. 1,200
	Marriage Assistance For Men	Rs. 3000
5	Marriage Assistance For Women	Rs. 5000
	Maternity Assistance	Rs. 6,000
6	Miscarriage/Medical Termination	Rs. 3,000
7	Spectacles Assistance	Upto Rs. 500
8	Pension	Rs. 1000/- pm

出所) Government of Tamil Nadu, Labour Department

(<http://www.labour.tn.gov.in/Labour/index.jsp>, 2013年7月16日アクセス)

3. 背景

本稿は、非組織労働者の組織化に取り組む女性オーガナイザーの声を拾うとともに、彼女たちの生活と労働をみることを目指している。途上国の貧困層の女性への聞き取りに関するアプローチで、とりわけ開発の観点やNGO等への組織化に関するもので最も多いのは、女性のエンパワメントに関連するものと思われる。インドに関する研究

としては、たとえば喜多村[2004]は女性自営者協会（SEWA）で活躍する人たちへの聞き取りから、女性がアイデンティティの形成を通じてエンパワメントされるプロセスを明らかにしている。労働組合に関しては、Agarwala[2013]が新自由経済主義の下に「インフォーマル・エコノミー」¹で働く労働者・労働組合と政治とのかかわりの動態を、説得的に論じている。タミルナードゥ州の建設労働組合の動きについては一部誤認がみられるが、「インフォーマル・エコノミー」における労働組合活動の意義を描くことに成功している点は高く評価できる。このほか逐一あげないが、途上国の貧困層の女性のエンパワメントに関する研究には、これまでに多くの蓄積がある。

筆者も女性のエンパワメントは非常に重要であると当然考えているが、労働組合の組織化や労使関係、また制度化への取り組みに関心を持つ筆者からは、それについて直接の研究テーマとしては思い浮かんでこなかった。本稿で紹介する女性オーガナイザーへの聞き取りは、実のところ次のような背景がある。筆者はこれまでに PTS 事務局長のスジャータ・モディ氏にチェンナイで何度か聞き取りをさせていただいており、ある時、氏から PTS の女性組合オーガナイザーの聞き取りをしてみないか、自分（モディ氏）も彼女たちがどういいういきさつで PTS に加入したのか知りたい、という話をいただいた。タミル語を話さない筆者にも通訳をつけてくれるということで、モディ氏のご厚意により実現したのが本聞き取りである。筆者としては組合オーガナイザーの聞き取りを通じて、非組織部門の組織化動態の側面を明らかにできるという期待を持ち、実際、福祉基金が労働組合の規模の拡大に貢献していたことを確認でき、きわめて意義の大きい一連の聞き取りであったと考えている。いずれにしても組織化には携わる「人」のイニシアティヴが重要であり、オーガナイザーの行動をみるのは不可欠と考える。

次節でみるように、本聞き取りからも労働組合活動を通じた女性のエンパワメントの実現が明瞭に描写されたと考えるが、いかんせん筆者の問題意識がそこにないため、研究論考としてのとりまとめに苦慮していた。また次項でも見るように、方法にも問題なしとはいえない。とはいえ、彼女たちの声は重要であると考え、基礎理論研究会の成果の場でもとめることとした。それが本稿である。次項ではこのような本稿の方法上の問題を述べる。

4. 方法

前項で述べたように、本稿が用いる聞き取りは、労働組合指導者の厚意で実現したものである。残念ながらサンプリング等に問題を抱えている。まず、聞き取りをさせていただいたオーガナイザーは、モディ氏とサンタナマリ氏が選んでくれた人たちである。したがって彼女たちの選択が代表制の面で問題がないか、大いに疑問である。より多くのオーガナイザーの紹介を依頼したが、オーガナイザーたちの仕事の都合でかなわず、聞き取り件

¹ 「インフォーマル・エコノミー」は筆者の概念ではないので、カッコに入れる。

数はわずか8件である。したがって統計的に何かいうことは難しい。本稿ではそこで、このような問題があることを逆手に取り、基本的には自由に語ってくれた彼女たちの言葉をできる限りにおいてすべて伝えることとした。それにより、実にさまざまな、なかには壮絶な人生経験をしている女性がいることがわかる。以下はもちろん語り手の主観であるし、彼女たちがそうである、またはそうであったと考える内容で、実際は違う可能性もある。それでも彼女たちの言葉を通じて、限定的な事例にはすぎなくとも、彼女たちがなぜ労働組合のオーガナイザーになったのか、また、タミルナードゥ州の女性労働組合オーガナイザーの生活と労働の一側面を垣間みることもできると筆者は考える。また、それ以上の知見を得ることができた点はすでに述べたとおりである。

聞き取りは2011年9月10日、11日の両日に、インド・タミルナードゥ州にあるPTSのアンバットゥール支部（9月10日）とチェンナイのキルポーク本部事務所（9月11日）で実施したものである。聞き取りは通訳を介して、英語とタミル語とのやり取りで行われた。通訳は、当時マラーチでインターンをしていたマドラス・ソーシャル・ワーク校の修士課程に在籍していたディヴィヤ・ムルガイアン氏が務めた。なお、本稿の年齢や肩書等はいずれも聞き取り当時のものである。

第2節 女性オーガナイザーの声、生活、労働

聞き取りを行ったオーガナイザーは次のとおりである。番号は本節の項に対応している。なお本節では敬称を省略している。

- | | | |
|-------------|------------|-----------|
| 1. ラティナヴァリ氏 | 2. パドミニ氏 | 3. プラメーラ氏 |
| 4. ヴィクトリア氏 | 5. サンタナマリ氏 | 6. スマティ氏 |
| 7. デヴィ氏 | 8. ゴウリ氏 | |

1. ラティナヴァリ（48歳）

ラティナヴァリはアンバットゥール地区担当のオーガナイザーである。教育は前期中等学校（8年）を卒業している。カーストは後進階級（Backward Classes、BC）で、親のアレンジで結婚した夫は自分とは異なるカースト出身者である。夫との間には息子が2人いる。

ラティナヴァリがPTSに加入したのは2006年である。当時アンバットゥール地区には別のオーガナイザーがいたが、病気がちで組合のミーティングにも出席できないことがあるなど、オーガナイザーとしての仕事を十分にこなすことができなかった。ラティナヴァリはアンバットゥール支部のミーティングには必ず出席し、夜遅くなってもミーティングが終わるまで、積極的に発言し参加していた。スジャータとサンタナ

マリは、病気がちなオーガナイザーには十分に療養してもらい、別のオーガナイザーを選出することを考えていた。ラティナヴァリの日頃の組合へのかかわりをみていた2人は彼女がオーガナイザーにふさわしいと考え、また他の組合員も、ラティナヴァリが新しいオーガナイザーになることを望み、PTSに加わったその年の2006年末に、ラティナヴァリはアンパトゥール地区の新しいオーガナイザーに就任した。

PTS 加入当時、ラティナヴァリは仕事をしていなかったが、それ以前は10年以上にわたってアパレル工場でテイラーとして仕事をしてきた。しかし彼女には呼吸器系の健康問題を抱えていて仕事を続けることができず、結局仕事を辞めざるを得なくなった。当時、彼女の家族はたくさんの借金を抱えていて、彼女はどのようにいいかわからないでいた。また借金のために彼女は自分の病気の治療で医療機関に行くことも薬を買うこともできなかった。就労もままならないことから、彼女は夫と2人の子供と無理心中することも考えていたという。

ラティナヴァリには以前、強い劣等感があり、また何に対しても恐怖心を抱いていた。外出することも人と話をすることもできなかったという。周りの人たちは彼女のことを慰めようとしたが、ラティナヴァリは、そういう人たちはただ単にちょっと自分のところにやって来てうわべだけのやさしい言葉はかけるが、しかし本当は自分のことなど気にかけてくれていないと考えていた。

そんな時、ラティナヴァリはPTSとそのオーガナイザーに出会った。とりわけサンタナマリからは、問題を抱えていない人などいないのだから、逃げていないで自分の問題に向き合いなさい、とアドバイスを送られた。サンタナマリと話をするとつれ、ラティナヴァリには内から力が湧きあがり、PTSに入ることにした。PTS 加入後は、ラティナヴァリは他の組合員たちからも勇気づけられ、自分の意識を変えることができるようになったという。組合員たちはいつも彼女たちの友人もつれてきて、一緒になってラティナヴァリにやる気を起こさせ、慰め、勇気づけ、そして助けてくれたという。またラティナヴァリはPTSという労働組合に加入して初めて、自分と似たような境遇の女性たちがいることを知った。自分と同じような境遇の人たちにラティナヴァリは自分自身を重ね合わせて、容易に共感することができた。PTS 加入後、ラティナヴァリは非常に行動的になり、それが自分に対する現在の自信にもつながっている。自分が変わったのは労働組合に加入したことが大きいとラティナヴァリは考えている。

ラティナヴァリは当初、ストライキや抗議行動などの組合活動に対して恐れを抱いており、またその結果として留置所に入れられることも怖かった。しかし今では全く気にならなくなったという。

ラティナヴァリは今、自分に自信を持っている。実のところ、まだ借金の返済は終わっておらず、自分の家が当局に土地の不法占拠でいつ取り壊されるかわからず、また自分の息子が失業中など、彼女の生活は以前と変わらず不安を抱えたままである。

何もかもに問題があり、夫も心配している。しかしラティナヴァリは、今は問題が何であれ、それに対処している。少なくとも気持ちの部分では、以前抱えていた問題を振り払い、現実の問題に向き合うことができているという。そして今では、問題は解決できるものと夫を励ましている。

ラティナヴァリは自分の経験を通じて、多くの人たちが彼女が以前そうだったように問題に向き合うことができず、些細な悩みにもかかわらず間違った人生を送っていることに気付くようになったという。PTS に加入していなかったら、これほど多くの人たちが自分以上に苦しんでいることを知ることはできなかったと考えている。ラティナヴァリは今、問題を抱える人たちに手助けや励ましをし、また自信を持ってもらいたいと考えている。彼女は自分と同じように問題に向き合い、それを乗り越えてもらいたいと考え、それがラティナヴァリの一層の動機づけにもなっている。

彼女は PTS に加入後、仕事のない人や恵まれた状況にない人たちが、アパレル工場での仕事や家事手伝いなどの仕事に就くのを手伝っている。また組合活動の一環として、福祉基金の給付の受け取りを手伝っている。自分の知り合った女性が本当に困っている時は、自分のお金を女性に分け与えることもある。PTS に加入して組合活動にかかわるようになって、彼女の心はこれほどまでに強くなっている。

2. パドミニ (42 歳)

パドミニはチョラナガール地区担当のオーガナイザーである。カーストは BC で、教育は受けていない。彼女は若い頃から家族に抑圧されて育った。家族はパドミニに外出も人と話すことも許さなかったという。これは、パドミニがトラブルに巻き込まれることを家族が案じたためでなく、彼女が外に出て人と話をして自分に自信を持つと、両親をはじめ家の人たちに対して敬いの念を抱かなくなると家族が考えたからだという。パドミニいわく、家族は自分をコントロールする必要がある、また彼女が自信を持ってしまわないように、外出させてはいけないと考えていた。結婚をした夫もパドミニの家族と同じように考え、彼女を抑圧しコントロールしようとした。夫は彼女を自由にはさせず、自分の考えを持つことを許さなかった。今朝このアンバットゥール支部に来る時でさえ、実弟は自分がどこに行くか問いただしてきた。特に農村部では時にこのような形で女性が抑圧され、外出したり人と交流させたりせずに、家族のなかで女性を自由にさせないというようなことが起こっているとのことである²。

² もちろん真偽は不明である。ただし、今回の聞き取りでは、時間の制約で長く話を聞くことができなかった別のオーガナイザーのミーナンバルも、夫がアルコール中毒者で、自分と子供たちを残して蒸発してしまった、と語っていた。これを含め筆者は、タミルナードゥ州の農村で、アルコール中毒の夫による妻へのひどい虐待の話を何度か耳にしたことがある。

パドミニは自分が結婚した年齢を覚えていないが、18歳か19歳の時までには3人の子供をもうけていた。彼女の夫はアルコール中毒者で、絶えず彼女を虐待し、彼女の両親にダウリー（結婚持参金）を要求した。パドミニの父もアルコール中毒者で、彼女の結婚の時に十分なダウリーを準備できなかった。両親は夫に当時7000ルピーを与えたが、それ以上のことはできなかった。夫はダウリーをもらうことはまったく当然の自分の権利であると考えていたが、自分が要求しただけのものは届いていなかった。夫はパドミニの家族から拒絶されていると考え、これで自分の名誉が傷つけられたと思ったといい、自殺してしまった。

夫の死後、家族とは別に暮らしていたパドミニの当時15歳だった実弟が彼女に、結婚も幸せも人生のすべても破たんしてしまった、といったという。もはや何の希望も機会も見つけることができず、彼女は3人の子供と弟とともに村を出て、チョラナガールにやってきた。

パドミニの弟はチョラナガールに土地がありそこに家を建てていたが、彼女はその隣に小さな小屋を建てることにした。彼女はそこで3人の子供たちと暮らしはじめたが、弟からは何のサポートも期待するなといわれたという。亡くなった夫は末っ子だったため、夫の家族からのサポートも何もなかった。誰の手も借りることのできなかったパドミニは、近所の人たちに彼女の抱えている問題や3人の子供を養う必要があることを話し、仕事の紹介をお願いして歩いた。こうして彼女は家事手伝いの仕事をみつけた。働きはじめた時は家事手伝いの仕事について何も知らず、うまくこなせなかった。自分の家から仕事先への移動や買い物への行き方すらわからなかった。こうしてパドミニのチョラナガールでの生活が始まった。

パドミニは家事手伝いの仕事を12年ほど前にはじめ、その間、同じ4家庭での仕事を続けた。しかし勤め先の家族は彼女のことをきちんと扱ってくれなかったという。たとえば彼女に服を与える時、新しいものではなく使い古しの服だったし、新しい服の場合は嫌がらせに服に切れ込みを入れて与えることもあったという。賃金は月150～300ルピーのみだった。このような低賃金にも関わらず、とても多くの仕事をこなさなければならず、また買い物など本来はしなくてもいいことまでさせられたという。あまりの仕事量の多さに、パドミニの長男は学校が始まる前と終わった後に彼女の仕事場に来て、一緒に仕事をした³。昨年、とうとう彼女はこれらの仕事を辞め、別の家庭で働きはじめた。現在は2つの家で家事手伝いをしており、賃金は月500ルピーと350ルピーの計850ルピーである。家事手伝いとしての業務には、定型的な、標準的なものがあるわけではなく、雇い主がいう仕事をすべてこなさなければならない。小

³ その後長男は家を出て、行方が分からなくなってしまった。

さな体でも大きな水瓶を持って⁴、離れたところにある井戸への水汲みもさせられる。休憩時にもらうお茶も家族の人たちに比べればわずかで、しかもまずい。労働組合のミーティングに参加するにも、その都度雇い主の許可を取らなければならないし、そのたびに根掘り葉掘り問いただされるという。

パドミニが PTS に加入したのは 2002 年である。加入当時は労働組合が何なのか、何をしてくれるものなのか、全く知らなかった。PTS 委員長のデヴィが近所で集会を開いていて、「何かもらえるかもしれないから、入ってみよう」という感覚で、パドミニは PTS に加入した。

息子の 1 人は現在、後期中等学校に通うが、2004 年にパドミニは息子の勉強のために奨学金をもらいたいと考えていた。彼女は組合員であれば奨学金は高校修了時までもらえることを知っていたが、自分の住む地区の組合オーガナイザーに詳細を話してくれる人は誰もいなかった。そこで PTS の事務所がどこにあるか周りの人たちに聞き、住所を手にした。しかしどうやって事務所まで行っていいかわからなかった。それでも奨学金を得たい一心でサンタナマリを含む色々な人たちに聞いて回った。これを通じて、パドミニは PTS の多くの人たちと知り合っていた。

息子のために 1500 ルピーの奨学金を得ると⁵、パドミニは労働組合が役立つものであることが実感できた。また自分は教育を受けていないが、2 人の息子の 1 人は後期中等学校に、またもう 1 人の一番下の息子は工業訓練学校 (ITI) に通っていることを誇りに思っている。ほかの女性も同じように給付を受けられるということで、パドミニはこれまでに近所の主に家事手伝いの仕事に就く 100 人ほどの女性を PTS に勧誘し、組合員にしている。そしてまた、彼女たちが他の給付を得るのも手伝っている。こうしたパドミニの積極的な行動にサンタナマリや他の組合員が注目するようになり、2006 年にアンバットゥール支部が開くと、パドミニはチョラナガール地区のオーガナイザーに就任した。

彼女はとても行動的で、組合ミーティングに参加するように多くの女性たちを誘いかける。そして実際、パドミニと話をした人たちの多くがミーティングに参加するという。仕事に責任を持ち、また約束も守ることが評判となり、彼女がオルグを担当する地区ではパドミニは名前が知られるようになった。今では PTS 加入を希望する裕福な人たちや男性もいるという⁶。

PTS の活動にかかわってから、パドミニには自信がつき、非常に行動的になった。

⁴ パドミニは背丈が 150 センチもなくまた非常にやせ細った、周りから目を引くほどの小柄な女性である。

⁵ パドミニは 1500 ルピーと述べているが、表 1 をみると、実際には 1000 ルピーである可能性が高い。

⁶ PTS は女性の一般組合で、男性組合員はいない。

今では実弟に自信を持って話ができ、自分の考えを伝えることができるようになったという。

3. プラメーラ（46 歳）

プラメーラはモガッパイル地区担当のオーガナイザーである。教育は前期中等学校を卒業していて、カーストは BC である。

プラメーラは近くのマーケットにある協同組合店舗や簡易食堂でお菓子を売っていて、また質屋も営んでいる。その前には家事手伝いやアパレル工場でテイラーをしていたこともある。質屋の資金はお菓子販売からの売り上げと、結婚した時に親からもらった宝石を売ったものである。親から譲り受けた宝石はとても多く、また毎日着飾るわけでもなくどうしていいかわからなかったのが、売って資金を得た。その資金をもとに、プラメーラはこれまでにお金を必要としていたり、問題を抱えたりしている多くの女性を助けてきた。通常、他人の日常には関与しないものだが、プラメーラの質屋に来た人たちは、自分たちの問題や家族状況など、いろいろな話を彼女にするので、彼女は事情通である。

プラメーラは質屋の仕事をする傍ら、困った女性には、時に自分の手持ちのお金から援助することもある。しかしそういう時でも現金では絶対に渡さず、台所用品など現物を与えるという。これは、直接お金を与えるとすぐに使ってしまっ、また同じ問題が生じてしまい、解決にはならないと考えていることによる。現物を与えることで長期の視点で困った女性を助けることができると考え、これまでに花屋をはじめのを手伝ったこともある。また、ある時、夫に捨てられた女性が 2 人の子供の教育費として 2000 ルピーを借りに相談に訪れた。プラメーラはお金を貸すのではなく、女性と一緒に学校に行き、彼女にかわって教育費を払ったという。質屋ではある程度裕福な人たちには相応の利息を求めるが、貧しい人たちにはわずかな利息しか求めず、もし返済ができないほど困っているような人たちであれば、無償で支援するという。その資金は裕福な人たちから返済される多めの利息分を当てている。

ある日プラメーラは質屋に行く時サンタナマリと出会い、貧困女性のために労働組合を作っていること、またその労働組合が貧困女性にどのように役立つかということについて話を聞いた。そこでプラメーラは、家族の問題を抱えたある女性をサンタナマリに紹介すると、サンタナマリはその女性の相談に乗り、また法的なアドバイスを求めてスジャータにも紹介した。スジャータも彼らの相談に乗ったりアドバイスをしたりするなどして、結局、その女性は問題を解決することができた。このプロセスをみていたプラメーラは、こうして労働組合がどのように人びとの役に立ち、また問題を解決するかを知った。プラメーラはこの経験の後、自分で問題を解決するより労働組合に話を持っていくほうが解決が容易であることに気づき、彼女に相談に来た女

性を PTS の事務所に連れて行くことにした。

これがプラメーラの PTS とのかかわりのきっかけだが、2007 年には自分自身が家を当局に取り壊される経験したこともあり、プリメーラは同年、PTS に加入した。加入当時、労働組合について知っていたのは困った人を助けてくれるということだけで、組合自体が何かは知らなかった。ただ、困った時に組合から誰かが来て助けてくれるのをみて、それなら自分も PTS に入ってみよう、PTS がどういうことをしているのかみてみよう、と考えたのが加入のきっかけである。加入後プラメーラは家事手伝いや工場に勤める女性が PTS に加入するのを手伝っている。PTS に加入して 6 か月で、プラメーラはオーガナイザーに就任した。

プラメーラは 2010 年に、アパレル工場労働者を組織化する GAFWU に 130 人の女性労働者が加入する橋渡しをしている。きっかけは、あるアパレル工場に勤める友人の 1 人がその工場での賃金の遅延などの問題などをプラメーラに話したことである。その話を聞きプラメーラは、アパレル工場労働者を集めはじめた。はじめは少人数だったのが、人づてに広がっていき、130 人までになった。彼女たちは工場の外や広場で集会を開いて工場の問題を話し合い、同時に家庭問題などの話もするようになった。プラメーラはまた、彼女が聞いた問題をサンタナマリに相談し、スジャータとメグナにも話が伝わった。プラメーラは PTS のオーガナイザーなので当然 GAFWU のことは知っていた。こうしてプラメーラが結集した 130 人は 2010 年に GAFWU に加入することになった。その後もプラメーラは GAFWU への勧誘を続けている。GAFWU の活動を通じて、加入した女性たちは従業員退職準備基金 (EPF) や州営従業員保 (ESI) といった給付も手にしている。

労働組合のオーガナイザーであり、また質屋という仕事柄から、プラメーラは女性が家庭や地域社会でさまざまな問題に直面していることを知る立場にある。プラメーラはそのため職場のことだけでなく、家庭や近隣のごみの収集や停電、街灯問題など、公共の問題に対しても高い関心を持っている。そこで彼女は他人の力になったり、行政に苦情を届けたりもしている。これらは労働組合の仕事とは関係ないが、このような意識が強く芽生えたのは組合活動に携わるようになってからだという。プラメーラは、みんなが他人に助けてもらっていて、小さいことであっても、自分にも何かできると信じている。

4. ヴィクトリア (40 歳)

ヴィクトリアはティルタニ地区担当のオーガナイザーである。教育は前期中等学校を卒業している。彼女はダリト・クリスチャン⁷である。ヴィクトリアの父は陸軍勤め

⁷ 元ヒンドゥー教の旧不可触民でキリスト教に改宗した人たちのこと。

で、小学校卒業時までカルナータカ州のバンガロールに住んでいた。その後家族はアラコナムに引越し、前期中等学校の卒業までそこにいた。彼女が学校教育を続けなかったのは通学距離が長くなり通うのが困難になったからである。20 年前の結婚を機に、ヴィクトリアは夫が住むポンパディに引っ越した。

敬虔なキリスト教信者であるヴィクトリアは、他人のために尽くすべきと考え、それを実践している。彼女は小さい時から叔母夫妻の近くの村での宣教活動について回ったが、とくに叔母から他人を助ける人になるように教わってきた。叔母は叔父とともに捨てられて身寄りのない女性のためのシェルターを提供する NGO を運営していて、また叔母たちは必要としている女性たちに、小さな商売をはじめる資金も与えていた。ヴィクトリアはこのような子供の時の経験が、ソーシャル・ワーク等の活動に関心を持つ今の自分に大きく影響していると考えている。

ヴィクトリアが現在労働組合活動に携わっている理由は、1 つには叔母をみていた影響があるが、別の理由として、自分が住んでいた村で前期中等学校を卒業し、読み書きができ、また行政に苦情をいうことができたのは彼女だけだったという事情もあったように考えている。周りからも社会のために何かをするのには、ヴィクトリアが一番適任と思われていた。彼女は旧不可触民だが、旧不可触民だけのためではなく、すべての人のために尽くしたいと考えている。

PTS の活動に参加する前にヴィクトリアは女性を助けるために多くの活動に携わってきた。障害者のための NGO で働いていたこともあり、そこでソーシャル・ワークに関心を持つようになった。近隣で組合勧誘をする PTS のオーガナイザーに出会ったのはその頃である。そこでヴィクトリアは労働組合について知り、自分の純粋な関心から、数人を PTS に勧誘していた。ヴィクトリアは今も 6 つの女性自助組織 (SHG) にかかわっていて、そのことが労働組合への女性の勧誘を楽にさせている。こうしてヴィクトリアは 2005 年 12 月に PTS に加入する前に、自分が住むポンパディ地区の女性 50 人を PTS に勧誘し組合員にしていた。

2005 年末の PTS 加入では、ヴィクトリアは初めからオーガナイザーとして加入している。加入後すぐに優れたオーガナイザーであることが周りから認められて、ティルタニ地区全体の責任者になった。ヴィクトリアは 2006 年～2011 年の 5 年間で 300 人余りの女性を PTS に加入させている。自分が PTS に加入したことについては、たまたま働いていた NGO のある村に PTS のオーガナイザーが来たというタイミングの問題だったのではないかと、その後は PTS の活動に魅せられて今日もかかわっているということとだと思ふとのことであった。

オルグ活動について、自分が住む村では問題はないが、別の村に行くと時に問題に出くわすことがあるとヴィクトリアはいう。たとえば NGR ナガールに行った時、彼女を初めてみかけた村人の男性は彼女が何をしに来たのか、なぜ女性たちだけに声を

かけるのか不審に思い、問いただしたという。男性はヴィクトリアが村にトラブルを持ち込むために来たのではないかと疑ったが、こういう時は、ヴィクトリアは自分のためだけでなく女性たちのために組合勧誘をしていること、労働組合に加入すれば、女性だけでなくその家族にも福祉基金の給付が得られることを説明する。このように、初めて行く村では通常、彼女は信用してもらえないという。そこで彼女は、自分のことを信じてもらえるように2〜3度足を運ぶことにしている。PTS加入時に50ルピー、また年会費として50ルピーを収める必要があることから、村人たちはヴィクトリアが自分たちをだましに来ている、先に政府からの給付を持ってこなければ信用しない、などといわれることもある。また、他のPTS組合員を連れてくるように求められると、自分以外の組合員証をみせたり、実際に何人かに一緒に来てもらって、組合員になるプロセスや給付などについて話をしてもらったりする。このように実際に行動で示すほうが疑う人には口で説明するより効果的であるという。また、ヴィクトリアは新しい村に行く時は、自分が知っている人からコンタクトを取るようにしている。その人物から他の家庭を紹介してもらい、そうして村民全員に話をする。職場でのオルグ活動は行っていない。

ヴィクトリアはPTSのオーガナイザーであるが、PTSのメンバーだけでなく近所の人たちが問題を抱えた時にはその解決のためにも尽くしている。また、そのような問題には、いつも労働組合を通じて解決しているという。たとえば村の悪路の問題を解決してもらいたい時には村人100人を動員してPTSに加入させ、村役場や警察に労働組合として圧力をかけて解決させた。村で食中毒が発生した時も彼女が行政に解決を求め、医療キャンプが設置された。学校の外壁が崩れそうになった時は、PTSのレターヘッドを使用して関係当局に苦情と改善の申し立てをして、修繕が認められている。またある時は別の村で生じたカースト間のいざこざの仲介役を務めた。その際、警察の介入が必要と判断する否や、100人の住民を引き連れて警察に行き、PTSの組合員証をみせながら、自分は労働組合活動をしていて、このコミュニティ間の問題を非常に憂慮していることを伝え、問題を鎮静化させたこともある。ヴィクトリアいわく、当局は労働組合活動に彼女が携わっていること伝えと、担当者の態度が変わり、問題の解決が容易になるという。

組合活動としては、組合員の子供の奨学金や出産手当などの福祉基金からの給付を得る手伝いももちろんする。組合員が給付を手にするのをみるのはうれしいが、同時に、彼女たちがPTSや自分の働きに敬意を表してくれることもうれしく感じている。

ヴィクトリアの家族は、彼女が組合活動にかかわることを理解してくれている。夫の家族はあまり協力的ではないが、それでも彼女がすることに口を差し挟むことはないという。

5. サンタナマリ（40 歳）

サンタナマリはアンバットゥール支部長で、ティルヴァッル地区のリーダーでもある。教育は後期中等学校を 1 年まで修了しているが、2 年目は学校を移る必要があり、通学距離の問題で退学している。カーストは BC である。サンタナマリはマドゥライそばの村の出身で、17 歳か 18 歳の時に結婚し、1989 年にアンバットゥールにやってきた。

アンバットゥールでは小さな商店を経営していたが、ある日、PTS 委員長のデヴィが近くで集会を開き、PTS の活動について話をしていた。みんながデヴィの話を聞きに行っているのをみて、興味本位でサンタナマリも集会に行ってみた。しかしその後 3 か月間、PTS や労働組合について何の話も聞くことがなかったため、デヴィの話が本当か気になりだし、配られたチラシに書かれていたスジャータの携帯番号に電話し、デヴィたちはまた来るといっていっこうにやってこない、その後どうなったのか、と尋ねてみた。実はこれは、誰かがコンタクトを取ってくるのを待とうというスジャータとデヴィの作戦だった。そうこうして PTS の勧誘にあい、サンタナマリは 2002 年 PTS に加入した。同時に、サンタナマリはお店の仕事を通じて多くの人と知り合っていることから、周りの人たちもみんな彼女が組合のオーガナイザーに適任の人物と考えた。サンタナマリは PTS に加入する際に、35 人の女性を連れてきて一緒に組合員になった。加入後の彼女の行動をみていたスジャータとデヴィは、加入から 3 か月後の 2003 年初頭には、早くもサンタナマリにオーガナイザーになってもらうことを考えていた。

サンタナマリは PTS 加入後も自分のお店を続けていたが、午後の半日は月 1000 ルピーで 1 人雇い、自分は午前中の店番の後、午後はオルグ活動を行った。当時はまだフルタイムでの組合活動ではなかったので、PTS からの手当を求めなかった。それでも、当時は女性たちに話しかけ、公共の場で集会を開くといった活動が中心だったので、それほど個人の持ち出しがあったわけではなく、何とかやっていくことができたという。こうして 4 年間、サンタナマリはボランタリーのような形で組合活動を続けた。その後 2006 年にアンバットゥールに支部事務所が開設されると、サンタナマリはその支部長になる。支部には以前よりも多くの女性たちが相談にやってくるようになり、オーガナイザーとしての仕事が増え、フルタイムで組合活動に携わるようになった。またその時まで、彼女は自分だけの力で 6 つの抗議行動も組織していた。こうしたサンタナマリの取り組みをみていたスジャータは、サンタナマリに専従手当を支給することを決めた。はじめは 1000 ルピーで、その後に 2000 ルピーになり、現在は 3000 ルピーの手当を支給している。

サンタナマリは 2008 年からタミルナードゥ州の経理担当を務めている。当初彼女は経理が何をするのか知らなかった。ある日、PTS から自分の写真がほしいといわれ、

その後に経理担当となったことを知られたという。何かあると夫にいつも相談するが、この時はそれも事後報告になってしまった。スジャータたちがサンタナマリを経理担当にしたのは、サンタナマリの行動力と責任感がみていたからである。サンタナマリは日曜日もオルグ活動を行っていて、過去2か月は1日も休みもとっていないという。彼女は組合活動のほか、貧困女性の子供たちを支援する活動にも、NGO 組織アクション・エイドとマラーチを通じて携わっている。またアパレル工場で起こっている問題対応にもかかわっている。このように彼女の組合活動に関する責任は今日、非常に大きいものとなっている。家族からは時々、なぜそこまで組合活動に力を入れるのか聞かれることもある。サンタナマリ自身は、困った人たちから電話がかかってくるなら無視できないという自分の性格によるものと考えている。夫も彼女のことを理解し、また彼女が引き受けている責任もわかっている。しかしその夫も、当局の不法占拠に反対して抗議行動をとったサンタナマリから、留置所から電話がかかってくる時にはショックを受けたという。サンタナマリはこれまでに3回、留置所に入っている。

第1節で述べたように、PTS ではオーガナイザーは、スジャータやデヴィが上から指名するのではなく、周りの組合員から認められた人たちが就任している。サンタナマリもそうしてみんなから選ばれた1人で、また支部長である彼女も同じようにオーガナイザーの指名はしない。オーガナイザーを選ぶ時はミーティングで組合員に話し合ってもらう。サンタナマリは、組合リーダーとしての資質として重要なのは、エゴを持たないこと、また地位や名声を求めないことであると考えている。リーダーである以前に出自やバックグラウンドに関係なく労働者の1人でなければならない。またサンタナマリは周りのオーガナイザーたちに、何事にも怒らず忍耐強くいるように話しているという。

サンタナマリが労働組合のオーガナイザーになったのは、外の世界をみてみたかったからである。また彼女が組合活動に携わるのは、自分と同じ地区に住む人たちが困っているのなら、彼ら・彼女らに向き合わなければいけないと強く信じるからである。困っている人たちにとって、サンタナマリだけが頼りであることもあり、責任を感じている。もし彼女の仕事で周りの人たちが恩恵を受けたなら、それは自分への動機づけにもなるとサンタナマリはいう。同時に、学校では学ばないことを、組合活動を通じて経験していることに幸せを感じている。今では彼女は多くのことを知り、警察や役場に出向き、問題を解決することができる。彼女がいろいろなことを経験しまた知ること、夫も彼女に敬意を持ってくれている。お金もちろん重要だが、自分の仕事に他人が尊敬の念を持ってくれることを大切にしてい、またやりがいも感じている。

6. スマティ (42 歳)

スマティはケランバッカム地区担当のオーガナイザーである。1985 年～1990 年に彼女は経済特区（SEZ）のアパレル企業で働いていたが、1990 年に結婚を機に仕事をやめ、子育てなど専業主婦になった。その後 1996 年に裁縫の教室で服の仕立てを学び、2000 年に女性自助組織（SHG）に参加して服の仕立ての仕事をするようになった。

2006 年にケランバッカムで PTS 委員長のデヴィが開いた集会に何気なく顔を出し、初めて非組織労働者のための労働組合を知った。SHG で裁縫の仕事をしていたこともあり、その場で PTS に加入した。スマティが PTS に入ったのは、SHG が女性だけを組織する集まりで、PTS も同様に女性の組織であるからであった。また SHG と同じように、PTS からも何か得られるのではないかという期待もあった。スマティの当初の PTS に関する認識はこの程度だった。また女性だけのグループだから、家族の理解も簡単に得られると考えた。

しかしスマティは PTS に加入した時、労働組合が何かについてあまり知らなかった。やらなければならないのは、できるだけ多くの組合加入申請書を書きさえすればいいと思っており、まさか警察や役場に行ったりしなければならないとは夢にも思わなかった。PTS に加入したのは 2006 年だが、労働組合の目的が何か、何をするものなのかを知ったのは 2008 年だった。

2007 年に、PTS の 200 人規模の集会がケランバッカムで開かれ、デヴィがそこでケランバッカム地区の組合員が増えたので、もう 1 人オーガナイザーを選ぶことを提案する。こうしてオーガナイザーに選ばれたのがスマティと、今はアパレル産業労働者を組織する GAWFU の副委員長を務めるゴウリの 2 人だった。2008 年に、今日多くの SEZ 企業が集まるスリパーアンブッドゥルに、PTS がカンチープラム地区最初の支部を開設すると、彼女たちの仕事は組合員の勧誘だけでなく、支部事務所での会議や報告など、それまで以上に仕事が組織化され、また量も増えた。

オーガナイザーに選ばれた時、彼女はまだ自分の責任の重さを認識していなかった。そもそもオーガナイザーになったのは 2007 年だが、組合が何をするものなのか知ったのはすでに述べたように 2008 年だった。もしこれほどまでの責任を負うことをわかっていたら、オーガナイザーにはならなかったと思うとスマティはいう。オーガナイザーになった今、自分の地区だけでなく担当外の他地区にも出向くことが多くなった。またスマティはオーガナイザーになったことで、オーガナイザーに必要なスキルを習得していった。警察への苦情のレターも今では 1 人で書けるし、情報権利法の下、情報開示を求めるレターを書くこともできる。

スマティは労働者の組織化に際して、何の問題にも直面しないという。ただ、彼女が勧誘に行っても、労働組合が必要だと思う人はいない。なぜ労働組合などが必要なのか、と尋ねてくる人たちもいる。そんな時彼女は、労働組合が組合員にもたらす恩

恵を話し、説得する。今ではスマティは組合活動に非常に詳しく、これが自信につながり、人と話をするのが容易になったという。組合に加入することで福祉基金から給付が受けられることを説明して、組合員に勧誘することに成功しているという。

スマティが 2006 年に PTS に加入した当時、ほぼ毎週、チェンナイのキルポーク本部で集会が開かれており、自宅から遠路はるばる行くのが大変だった。交通の便を考えると、帰りが遅くなることも心配だったが、今では時間を気にすることもなく、また自分の仕事量もわかっているし、家族に自分の仕事について説明できる。組合活動で警察に逮捕されても家族は彼女を理解してくれている。ただし親戚にはあまり好意的に思われていないかもしれないという。

7. デヴィ (43 歳)

デヴィは PTS の委員長である。教育は後期中等学校を卒業している。自分のカーストは覚えていないが、旧不可触民ではない。夫は違うカーストの出身である。

デヴィは人と話をするのが得意で、容易に良好な関係を築くことができる。非常に才能豊かな人である。彼女は小説を書くことも、歌を書きまた歌うこともできる。即興での芝居もでき、それがオルグ活動にも役立っている。料理から何から、とにかく何でもできる。デヴィは女性に非常に人気があり、また人を惹きつける人物でもある。物事の説明にも長けている。宗教やカーストに関係なく分け隔てなく人に接するのは子供の時からだったという。また小さい時から仕事に対する尊厳を重んじていた。

デヴィの父はイギリスに対する独立運動を闘った海軍兵で、自分が小さい時から彼女は父と比較された。父は旗を持ち、誰かに対してスローガンを叫ぶことがあった。デヴィが今人の役に立ち、また人を指導する立場にあるのは父親の影響があるかもしれないとデヴィはいう。

デヴィが後期中等教育の修了証をもらったのは、通常は 16 歳であるところ、手続きの遅れで 18 歳になってからだった。そのため彼女は進学できず、就労を考えてタイプライティングを学ぶ。当時、インド共産党（マルクス主義）が近隣で集会や抗議行動を行うことがあったが、何が起きているのかデヴィにはわからなかった。1991 年頃なんとなく顔を出してみたくなって集会をのぞいたところ、女性への暴力に対する集まりだった。これが彼女の最初の政治的な集会参加で、その後集会に継続的に参加するようになった。

しばらくしてデヴィは、タミルナードゥ女性フォーラム（TNWF）を組織するファティマ・バーナドと知り合う。デヴィがファティマに出会ったのは自分の子供の学校入学でちょっとした問題を抱えていた時だった。当時のデヴィはボランティアで、近隣での喧嘩や家庭内暴力をやめさせたりしていたが、ファティマはデヴィのそうした行動力に大きく感銘を受け、TNWF に勧誘した。こうしてデヴィは旧不可触民の女性

のために活動する TNWF にかかわるようになる。その後デヴィは 1994 年に TNWF を離れ、タミルナードゥ家事労働者 (TNHW) という NGO に参加した。TNWF を去ったのは手当の額が低くて、家族を養うのに十分でなかったからである。TNHW では女性の家事手伝い労働者を動員しながら、しかし別の仕事にも就けるよう職業訓練も担当した。また女性の護身のため、彼女たちに空手も教えた。

デヴィが TNHW で活動していた 1998 年に、TNHW に対する外部評価の関係でやってきたスジャータに会う。スジャータはすぐにデヴィの才能に惚れこみ、自分が主催する NGO のマラーチ女性資源センター (マラーチ) に勧誘した。当時デヴィは TNHW とあまりうまくいっていなかったこともあって、すぐに意気投合し、マラーチの活動に参画することになった。マラーチは当時、住居や子供のデイケアセンターの設置など、建設業で働く女性労働者や子供たちへの福祉活動に取り組んでいた。

1999 年にスジャータは非組織労働者のための労働組合を結成することを決め、2001 年に労働組合としての登録を行った。これが PTS の誕生である。当初、デヴィは労働組合が何か知らず、今まで彼女がかかわってきた NGO と同じように単に女性のために活動する組織か何かで、違うのは名前だけで仕事内容は同じだろうと考えた程度であった。PTS が活動を開始するとデヴィは書記に就任し、その後副委員長になり、現在は委員長を務めている。

デヴィが NGO の活動にかかわりはじめた頃、彼女は、多くの女性が家庭内や社会で売春やセクハラ、また虐待などといった暴力と隣り合わせに暮らしている、と考えていた。PTS で労働組合としての活動をはじめて、デヴィは職場の内外での労働者としての権利やエンタイトルメント (権原) について学ぶことになる。労働組合に加わり、デヴィは労働者の賃金が低すぎることを、また適切な賃金を得るのは労働者としての当然の権利であること、さらに労働者は社会保障の恩恵を受ける権利があることと強く考えるようになった。今日委員長という立場で組合員全員と向き合い、彼女たちの自分への期待の大きさと、自分の責任の重さと感じ、彼女たちに対してすべてを尽くすつもりでいる。もちろんお金は重要だが、組合活動に携わるのはお金の問題ではない。

デヴィの夫は妻が何をしているかよく知らないようだが、彼女は帰りが遅くなる時には必ず電話をして、問題なくやっていることを伝える。夫はデヴィを問いただすことではないという。彼女には大きな子供が 2 人いるが、娘はデヴィに仕事をしないしてほしいと考えている。娘は組合については何も知らないが、息子は中央政府で働きはじめた後に組合について知るようになり、今では自分の母親が組合活動にかかわっていることに誇りを感じはじめているという。

8. ゴウリ (46 歳)

ゴウリは元 PTS オーガナイザーで、現在は GAFWU の副委員長を務める。教育は後期中等学校を卒業している。カーストはブラフマンである。

ゴウリはクンバコナム出身で兄弟姉妹が計 5 人いる。彼女は親の方針で勉強よりも働くように強くいわれ、10 年の教育の後、16 歳で働きはじめた。最初の仕事は自宅から少し離れた家庭での住込みの家事手伝いだった。その家は 9 人家族で、月額わずか 100 ルピーという小額で、朝 5 時から夜遅くまで、家のすべてのことをしなければならなかった。はじめは休暇すらも与えられなかったが、6 か月が経過して、1 日の休暇をもらい実家に帰ることにした。荷物を作っているときに前日もらった先月分の賃金 100 ルピーも鞆に入れようとしたころ、家の年配の人物が、100 ルピーを彼女が盗んだといい出した。盗んだのではなく前日もらった給料だといっても信じてもらえず、大きく傷ついたゴウリは自分が稼いだ 100 ルピーをその家族に渡し、代わりに交通費としてもらった 10 ルピーを手に入れた。もちろんゴウリは仕事を辞めた。

この事件後、しばらくゴウリは実家を出ることができなかった。17 歳になったゴウリは、鍛鉄製造会社に月 180 ルピーの給与で就職した。その会社は何の決まりもないような小さな工場だったが、ゴウリはそこで手にけがを負ってしまった。当時、ゴウリは労災補償を受けることができるかどうか、また、何らかの規制の有無や自分の権利についてすらも知らず、雇い主にも尋ねなかった。その会社は彼女に 2 か月分の賃金を支給し、また治療費も出してくれたが、それ以外は何もなかった。このけがのためゴウリは仕事を続けることができず、会社を辞めることになった。

その次にゴウリは、プラスチック・カバーの製造会社に正社員として、先の会社と同じく月 180 ルピーの給与で就職した。けがも徐々に良くなってきたが、彼女の父のチェンナイへの転勤の都合で 1988 年に転職した。チェンナイではクンバコナムに住み、すぐに月 350 ルピーでビスケット製造会社に就職した。彼女は自分の稼ぎをすべて服の仕立ての習得に費やした。

ゴウリは以上でみた会社では、州営従業員保険 (ESI) や従業員退職準備基金 (PF) には加入しておらず、また彼女はそれらの社会保障制度があることすらも知らず、会社も従業員に話すことはなかった。当時、とくに中小企業ではそれらの社会保障制度は紙の上に書かれたもので、企業は負担を嫌って従業員に社会保障について周知しようとしなかった。農村部に行けば ESI などというものは存在すらしない。ただ当時の労働者にとっては、日々の賃金をどう稼ぐかのほうが重要で、解雇の危険を冒してまで社会保障を雇い主に求めるなどということはありませんでした。

ゴウリが勤めていたビスケット会社は、移転に伴い閉鎖されることになった。そこでゴウリは、1990 年にタンバラムの SEZ にあるアパレル工場に就職した。彼女はそこでテイラーとして働いたが、彼女が裁縫の教室で学んだのとは違う電動ミシンを使用した。そこでゴウリは月 300 ルピーを稼いでいたが、100 ルピーが通勤で消えてし

まった。1995年の結婚とともにゴウリはその会社を辞めることになったが、その時1万3000ルピーが退職金として準備基金（PF）から支給された。彼女は会社が給与の天引きをしていたのは知っていたが、支給された額が適正かはわからなかった。こういった社会保障や労働者の権利について、当時のゴウリは全く知らなかったが、少なくともいろいろな仕事を経験する機会には恵まれていたと考えている。2000年以降は女性自助組織（SHG）にも加入している。スマティとは別のグループではあったが、SHGで知り合った。

ゴウリがPTSに加入したのは2006年で、2007年にスマティと一緒にオーガナイザーに就任している。しかしゴウリは組合加入時には、労働組合活動が何をするものかまったく知らなかった。ただ、組合に加入すれば誰かが自分たちを助けてくれて、また奨学金などが政府からもらえるくらいのイメージは持っていた。ゴウリにとって労働組合は、福祉プログラムの恩恵を受ける一番簡単な方法だった。ゴウリがPTSに加入したのはこれが理由である。実際、彼女は労働組合を通じて福祉基金からの給付を受け取った。デヴィがいうには、こうして労働組合は組合員を支援しており、ゴウリも同じように多くの女性たちを支援することができるようになる、とのことだった。それを聞いた彼女は、PTSに加入しても組合員としての仕事は女性の勧誘程度のたいしたものではなく、デヴィに何人か紹介すればいいだけの楽なことと考えた。

しかし実際はこれほどまでにすることが多く、また大変だとは思ってもよらなかった。2007年にオーガナイザーに就任したが、もうこれ以上責任のある仕事はしたくなかった。ところが彼女は、それまでにいろいろな仕事経験をしており、またアパレル企業に勤めていたこともあって、結成されたばかりのGAFWUに2009年にPTSから移り、現在はGAFWUの副委員長を務めている。その間、アパレル工場では問題も発生していて、その対応のほか、PFやESIの確実な履行を企業に要求するため、その前段階にそれらの社会保障をメグナと2人でゼロから勉強することになった。こうした経験はゴウリの自信にもつながっている。

ゴウリは筆者に冗談めかして、なんで組合活動などにかかわったのだろうと嘆いてみせたが、それでも、組合活動に携わることで、毎日毎日を新しく感じ、また新しい責任があることで充実感を持っているとのことである。

おわりに

本稿を通じて、一端ではあれ、タミルナードゥ州の女性労働組合オーガナイザーの生活と労働をみることはできたのではないかと考える。また、労働組合による組織化に関しても知見を得ることができた。まず、聞き取りを行ったオーガナイザーは、大きくは2つのタイプが目をつけた。第1が（元）社会的弱者としての特性が強いタイ

プ、第 2 が組合活動に携わる前からの指導者としての資質を備えていたと思われるタイプである。(前節の項の番号では)前者はとりわけ 1 と 2 の 2 氏、後者については 3、4、5、7 の 4 氏である。

前者 2 氏については、組合加入前の家庭環境あるいは生活環境もあって自分に自信を持てずにいたが、PTS に関わりを持つことを通じて自らの可能性を切り開く道を模索し、同時に現在の自己に充実感を感じているようであった。また、自らが労働組合への関わりから自信を得たことから、他の弱い立場にある女性労働者を積極的に励まそうとする姿勢が明確にあらわれていた。それが PTS への女性労働者の勧誘につながっている。労働組合活動を通じた、エンパワメントである。そしてそのエンパワメントが、労働組合の規模拡大に貢献している。

いずれのオーガナイザーも、自分の果たしている役割に誇りを持ち、また自分が周囲の女性労働者から信頼されていること、頼られていることに意義を感じているようである。同時に、女性の組織化にあたって、同じような境遇にあるという仲間意識も重要であるようであった。

オーガナイザーたちが語った中で目を引くのが、労働組合に関わる前の段階では労働組合に関する知識が皆無であったこと、また、労働組合に加入することで福祉給付・社会保障の恩恵が受けられるという、労働組合が行政の末端組織の一部であるという誤解がみられたことである。前者については、労働者に対する地道な教育活動が組合の組織化に不可欠であることを示唆しているように思われる。

後者について、福祉基金の給付を受けるのにはもともと労働組合への加入は必要ないが、労働組合はその受給の手助けをすることを通じて、本稿での聞き取りからも明らかのように、間違いなく組合員を獲得してきた。すなわち、福祉基金の存在が組合規模の拡大に資していた。それが 2008 年の手続き変更によって、労働者の福祉基金の登録時に、労働組合関係者が同伴することを禁じられてしまった。貧困層には非識字者も少なくなく、彼ら・彼女らは、誰かの手を借りなければ福祉基金への登録は難しい。それまでは主に労働組合がその手助けをしてきたが、現状ではもはや労働組合に頼ることはできない。もちろん最低限の福祉にかかわることでもあるので、貧困層の組織化に取り組む労働組合は、この手続き変更非常に強く反対し、撤回を求めている。他方で、福祉基金を利用して組織規模の拡大をしてきた労働組合にとって、変更のダメージは小さくないものと思われる。福祉基金をめぐるっては別の場で改めて論じることとする。

参考文献

- Kannan, K. P. [1999] “Changing economic Structure and labour Institutions in India: Some Reflections on Emerging Perspectives on Organising the Unorganised”, *The Indian Journal of Labour Economics*, Vol. 42, No. 4, pp. 753-768.
- Agarwala, Rina [2013] *Informal Labor, Formal Politics, and Dignified Discontent in India*, Cambridge University Press: Cambridge.
- 太田仁志 [2009]「組織化趨勢でみる労働組合の代表性と労働運動の動態 —インド労働組合の政治経済論—」、近藤則夫編『インド民主主義体制のゆくえ —挑戦と変容—』、2009年11月16日、研究双書 No.580、日本貿易振興機構アジア経済研究所、2009年11月16日、pp. 81 - 121.
- 太田仁志 (2011a)「インドの非組織部門における労働組合の組織化考」『早稲田商学』第428号 (2011年3月発行) pp. 203-234 早稲田商同攻会.
- 太田仁志 (2011b)「中央労働組合組織の組織化動向とゆくえ」『アジ研ワールド・トレンド』No. 184 (2011.11)、pp. 8-13.
- 喜多村百合 [2004]『インドの発展とジェンダー: 女性 NGO による開発のパラダイム転換』新曜社、2004.
- 佐藤宏 [2003]「インド・ケーララ州における社会保障政策」 宇佐見耕一編『新興福祉国家論：アジアとラテンアメリカの比較研究』アジア経済研究所 pp. 281-330.